【用語】京学―京都で学問をすること　案事―心配　大小―打刀と脇差　備前兼光―備前長船の刀工　菊一文字―刀剣の名、刀茎に一六葉の菊紋を刻す　何卒―どうか、ぜひ　慈顔―いつくしみ深い顔

【解説】高山彦九郎は、尊王倒幕運動の先駆者として知られ、林子平・蒲生君平とともに寛政の三奇人と称される。農民でありながらも、先祖は新田氏につながるという出自の認識を契機に学問を志し、当時京都を中心に広まっていた垂加流の尊王思想の影響を受け、全国の著名士と交わった人物であった。彦九郎は、延享四年（一七四七）新田郡細谷村（太田市）の郷士高山家の次男として生まれた。名を正之といい、彦九郎は通称である。幼時には伊勢崎の松井晩翠の塾で大義名分論を学び、また叔父の影響から崎門学派、陽明学、吉川神道の影響を受けて成長した。

宝暦十四年（一七六四）、彦九郎は祖父あてにこの置文を認めて京都への遊学に出発したのである。慰留されないよう密かに出かけたこと、家宝の大小刀を蔵から持ち出したが、これを餞別としてもらいたいことなどを記している。京都では著名な学者を訪問して教えを受け、その後は諸国を遍歴しながら多くの公卿や全国の著名士と交遊した。なかでも蘭学者の前野良沢・良庵父子は最大の理解者であった。しかし、彦九郎の行動は幕府の嫌忌するところとなり、寛政五年（一七九三）幕府役人の追跡をうけ、九州の久留米（福岡県久留米市）で自刃した。